

最初の大成功を収めた《幸せな間違い》

1811年11月末にコルソ劇場の仕事を終えたロッシーニはヴェネツィアを再訪し、サン・モイゼ劇場のための1幕のファルサ・ペル・ムジカ《幸せな間違い (*L'inganno felice*)》に着手した。台本は、ジュゼッペ・[マリア・] フォッパ (Giuseppe [Maria] Foppa, 1760-1845) があらかじめ準備していた。フォッパはヴェネツィアの裁判所の書記官をしながらサン・モイゼ劇場の台本を手掛けた詩人で、生涯に書いた台本は約150にのぼる(ロッシーニ作品は《幸せな間違い》《絹のはしご》《ブルスキーノ氏》《シジスモンド》の4作)。《幸せな間違い》の原作は不明で、従来文献におけるパイジェットののためのジュゼッペ・パロンパ台本《幸せな間違い (*L'inganno felice*)》(1798年)とする説は台本の比較研究で否定され<sup>1</sup>、伝説や説話にしばしばみられる設定——高貴な女性が夫や恋人に誤解されて不遇の身となり、殺されそうになるが、同情した者によって救われる——をフォッパが独自に再話したと推測され、これに先立つフォッパ劇『マティルデ、または森の女 (*Matilde ossia la donna selvaggia*)』も同様の背景を持つ(1800年1月29日ヴェネツィアのサンタンジェロ劇場初演。出版は1807年。後に《シジスモンド》の原作となる)<sup>2</sup>。

《幸せな間違い》は海に臨む山間の谷の傍らに坑口が見えるとの舞台設定で、夫に捨てられ鉱山で暮らす公爵夫人をヒロインに、ロマンティックな雰囲気が漂うなか次の物語が繰り広げられる。

■あらすじ

**全1幕** 山間の谷の鉱夫長タラボットは海岸に流れ着いたイザベッラを救い、自分の姪と偽って10年間保護していた。彼女はベルトランド公爵の妻だったが、横恋慕したオルモンドによって不貞の疑いをかけられ、小舟で海に流され死んだと思われていた。ある日鉱山を視察した公爵は、妻にそっくりな女を見て驚く。イザベッラは夫の誤解が解けるまで正体を明かさぬつもりでいたが、悪事の露見を恐れたオルモンドがイザベッラを誘拐して殺そうと企む。これを知った公爵はオルモンドを逮捕させ、イザベッラへの仕打ちを詫びて再び妻に迎える。

初演を予定した1811/12年謝肉祭のサン・モイゼ劇場では、名歌手テレザ・ベッコク (Teresa Belloc [生名: マリア・テレザ・オッターヴィア・ファウスティーナ・トロンベッタ Maria Teresa Ottavia Faustina Trombetta], 1784-1855) をプリマ・ブッフア・アッソルータとする歌手団が組まれていた(図34)。ベッコクは当時の北イタリアを代表するソプラノ歌手で、トリノーのレージョ劇場に17歳でマリア・テレザ・ジョルジ (Maria Teresa Giorgi) の芸名でデビュー、1804年に19歳でミラーノのスカラ座のプリマ・ドンナとなり、06~07年にも出演していた<sup>3</sup>。1810年のナポリ・デビュー、パーエル作曲《グリゼルダ》でも「豊かで心の琴線にふれる声で格別の喝采を博している。これ以上真実に歌うこと、これ以上技巧的かつ魅力的に魂の情熱と動きを表現して歌うことは出来るものではない」(『コリエーレ・デッレ・ダーメ (*Corriere delle Dame*)』1810年7月14日付)<sup>4</sup>と絶賛されるなど、高い評価を得ていた。



図34 テレザ・ベッコク

《幸せな間違い》の初演配役は次のとおり。

役名と声種	歌手
ベルトランド Bertrando (テノール)	ラッファエーレ・モネッリ (Raffaele Monelli, 1782-1859)
イザベッラ Isabella (ソプラノ)	テレザ・ジョルジ=ベッコク (Teresa Giorgi-Belloc, 1784-1855)
オルモンド Ormondo (バス)	ヴィンチェンツォ・ヴェントウーリ (Vincenzo Venturi, ?-?)
バトーネ Batone (バス)	フィリッポ・ガッリ (Filippo Galli, 1783-1853)
タラボット Tarabotto (バス)	ルイーダ・ラッファネッリ (Luigi Raffanelli, 1752-1821)



図35 フィリッポ・ガッリ

ベッコク以外の特筆すべき歌手は、バトーネ役フィリッポ・ガッリ (Filippo Galli, 1783-1853) である(図35)。1801年ナポリでテノールとしてデビューし、重い病気を経て1811年にバス歌手として復帰した若き逸材で、壮麗にして柔軟な声に恵まれ、《セミラーミデ》に至る重要作品の初演歌手となる<sup>5</sup>。

この作品は形式的には1幕ファルサに該当するが、劇の内容からオペラ・セミセーリア (opera semiseria) にも区分しうる。このジャンルは18世紀後半に感傷的メロドラマやお涙頂戴劇としてフランスで誕生し、イタリア・オペラではパイジェットの《ニーナ、または恋に狂った娘 (*Nina, o sia La pazza per amore*)》(1789年)が広く流布したが、フランス革命期に不当逮捕や公開処刑が日常化すると窮地からの脱出や救出を盛り込む救出劇 (ピエス・ア・ソ

ヴァーヴェル [pièce à sauvetage]) に関心が移った。その出発点が、ベートーヴェン《フィデーリオ》の原点に当たるジャン＝ニコラ・ブイイ (Jean-Nicolas Bouilly, 1763-1842) 台本、ピエール・ガヴオー (Pierre Gaveaux, 1761-1825) 作曲のオペラ・コミック《レオノール、または夫婦の愛 (Léonore, ou L'Amour conjugal)》である (1798年2月19日パリのフェイドー劇場初演)。ロッシーニ作品は《幸せな間違い》が最初で、その後4作が作られる (《トルヴァルドとドルリスカ》《泥棒かささぎ》《マティルデ・ディ・シャブラン》《アディーナ》)。

楽曲は才気に富む序曲 (シンフォニア) と八つのナンバーからなり<sup>6</sup>、導入曲〈なんだと！われらの公爵がいま (Cosa dite! il nostro duca)〉(N.1) はモティーフの反復をベースにした活気ある音楽で始まり、イザベッラのソロ〈なぜおまえの心から追い払えるのでしょうか (Perché da tuo seno)〉を挟み、魅力的な楽想を含むタラボットとの掛け合いで閉じられる。続くベルトランドのカヴァティーナ〈なんと優しい喜びが (Qual tenero diletto)〉(N.2) は、フルート独奏の装飾的なオブリガートに特色がある。バトーネのアリア〈あの声が私を打った (Una voce m'ha colpito)〉(N.3) はバスの幅広い声域と技巧を駆使する秀曲で、二人のバスの軽妙で爽快な早口言葉を含むバトーネとタラボット二重唱〈囁く者もいるが (Va taluno mormorando)〉(N.6) も愉快。中でも優れた楽曲が、変化に富みセンス抜群の男声三重唱〈あの顔つき、あの眼差しが (Quel semblante quello sguardo)〉(N.4)、優美なカンタービレとカバレッタの対比が見事なイザベッラのアリア〈最も優しく愛しいお方に (Al più dolce e caro oggetto)〉(N.7) である。フィナーレ〈穏やかで静かな夜 (Tacita notte amica)〉(N.8) は規模の大きなアンサンブルで、アンダンテ・マルカートでバトーネがしっとり歌い始め、他の人物が順次加わって進行し、ヴィヴァーチェの華やかなアンサンブルで締め括る (図 36)。



図 36 《幸せな間違い》総譜初版 (ローマ、1827年。ロッシーニ財団所蔵)

1812年1月8日にサン・モイゼ劇場で行われた初演は輝かしい成功を収め、ロッシーニに最初の栄光をもたらした (初日のみ単独上演で、1作のバレエを併演と推測)<sup>7</sup>。翌日、興行師チェーラはロッシーニの母アンナに手紙を送り、「好評などというのではなく真の大成功 (vero furore) を収め、観客はシンフォニアからフィナーレの最後まで熱狂し、「ああ、なんて美しい音楽だ！」と叫び続けていました。ファルサが終わると [ロッシーニは] 心のこもった拍手喝采を受けに舞台に呼び出されましたが、こうした恵みは普段は無く、稀なことです。真心からあなたに申し上げますが、[中略] [あなたの息子さんは] これから数年でイタリアの誉れとなり、人は、チマローザが死んでおらずその靈感がロッシーニに乗り移ったと話すようになるでしょう」と称賛し、「春に1作、秋に1作、そして謝肉祭に1作の三つのファルサ」の契約を結びました、と報告している (1月9日付)<sup>8</sup>。1月11日付『ヴェネト毎日新聞 (Quotidiano Veneto)』の批評も、「優秀で才能ある若きマエストロは昨年自身の最初の作品を発表していたが、彼はこの作品で自分の名声を堅固なものとした。そして一層の熱狂と繰り返された全員の喝采は、[中略] 真の功績に報いるすべを知る聴衆による確かな評価のしるしである」と絶賛した<sup>9</sup>。

《幸せな間違い》はシーズン終了の2月11日までに合計14回上演され<sup>10</sup>、最終日の熱狂を『ヴェネト毎日新聞』が報じている——「本日、マエストロ・ロッシーニ氏の美しい音楽によるサン・モイゼ劇場の優れたオペラ団による一連の公演が終了した。その場を利用してジョルジ＝ベッコに熱烈な感謝が表明され、傑出した芸術家を讃える肖像画や詩がふるまわれた。喝采は偏った追従ではなく、むしろファンたちが一斉に競い合うように、その功績と素晴らしさに衝き動かされて起こった。[中略] 杖敷席から榮譽のしるしに鳩やカナリア、野性のホロホロ鳥が投げ放たれた」(2月11日付)<sup>11</sup>。ロッシーニは3月24日付の母宛の手紙に、「ヴェネツィアでは総ての愛好家がぼくのファルサの曲を歌い競っています」<sup>12</sup>と反響を伝えている。

満足した興行師チェーラは春のシーズンに新たな歌手団の再演をサン・モイゼ劇場で行わせ (初日は5月23日)、ロッシーニにイザベッラ役マッダレーナ・チェーラ (Maddalena Cera, 興行師チェーラの妹<sup>13</sup>) のための新たなアリア〈もしもその胸に憐れみ心をお持ちなら (Se pietade in seno avete)〉を作曲させ、〈最も優しく愛しいお方に〉と差し替えた。作品は短期間にイタリア全土に流布し<sup>14</sup>、1819年までの8年間に約60回、1820～29年の10年間に約110回に達した。国外では1815年12月14日のバルセロナを皮切りに、1818年ドレスデン、フランクフルト、ヴァイマル、1819年パリとロンドン、1820年マドリッド、ワルシャワ、ポルト、ベルリン、ベルンと続き、1850年ベルリンを最後に途絶えた<sup>15</sup>。20世紀の復活上演は1956年9月22日、シエナのキジアーナ音楽アカデミーで行われた<sup>16</sup>。

### 《バビロニアのチーロ》

《幸せな間違い》の初演を終えたロッシーニは、1812年1月末もしくは2月初めに新作オペラのためヴェネツィアからフェッラーラに移動した。フェッラーラのコムナーレ劇場 (Teatro Comunale 1798年9月2日 M.A.ポルトガッロ作曲《オラーツィとクリアーツィ》で開場) との新作契約に関するドキュメントは現存せず、委嘱の経緯も詳らかでないが、ロッシーニの作曲する2幕の合唱付き音楽劇 (ドラマ・コン・コーリ・ペル・ムジカ) 《バビロニアのチーロ、

またはバルダッサーレの没落 (*Ciro in Babilonia, ossia La caduta di Baldassare*) の台本作者フランチェスコ・アヴェンティ (Francesco Aveni, 1779-1858) が作曲を依頼したと推測する者もいる。アヴェンティはナポレオン支配下で国軍司令官を務めたフェッラーラ有数の貴族で、ロッシーニが同地でマエストロ・アル・チェンバロを務めた 1809～10 年謝肉祭に面識を得ていたと推測されるのだ<sup>17</sup>。けれども別な可能性もある。それがこのオペラの主演チーロを歌うマルコリーニで、前作《ひどい誤解》から親しい関係にある彼女がロッシーニを評価し、フェッラーラの興行師ジュゼッペ・カーザ (Giuseppe Casa, ?-?) に売込んだ可能性も捨てきれない<sup>18</sup>。

フェッラーラのコムナーレ劇場が求めたのは、四旬節 (Quaresima 復活祭前の 40 日間) 用の旧約聖書に題材を求めた聖劇 (ドランマ・サークロ *dramma sacro*) である。このジャンルはオラトリオとも称されるが、衣装と装置を伴う舞台形式の宗教オペラ (オペラ・サークラ *opera sacra*。宗教的題材のオペラ・セーリアに該当) で、四旬節に聖劇を上演する伝統は 18 世紀末に始まり、フランス軍によるイタリア支配の間に定着していた。台本作家アヴェンティは旧約聖書の「ダニエル書」第 5 章に題材を求め、次の物語を構成した。

### ■あらすじ

**第 1 幕** ペルシア王チーロに勝利したバビロニアのアッシリア人の王バルダッサーレは、捕虜にしたチーロの妻アミーラを娶ってバビロニアを手中に収めようと企てる。チーロは妻を救うべくアッシリア特使に変装し、バルダッサーレと対面して人質釈放を求めるが、正体がばれて捕らわれ、死刑を命じられる。

**第 2 幕** 地下牢に入れられたチーロは、バルダッサーレに勝利したらヘブライ人を解放すると神に約束する。祝宴でバルダッサーレが勝利の美酒に酔っていると不意に嵐が起り、不思議な手が壁に謎の文字を記す。預言者ダニエーレはこれをバルダッサーレの死とバビロニア没落の暗示と読み解くが、バルダッサーレはチーロとその妻子の生贄を命じる。だがアルバーチェ率いる軍が反乱を起こし、攻め込んだペルシア軍がチーロを救出してバビロニアを制圧する。

バルダッサーレは史実の新バビロニア王ベルシャザル (新共同訳の聖書ではベルシャツァル)、チーロはペルシア王キュロス [2 世] (紀元前 600 頃-紀元前 529) であるが、「ダニエル書」の記述と史実の間に違いがある。ロッシーニは 2 月 18 日の母宛ての手紙に、「ぼくのおラトリオは順調でこれまで書いた曲はみな美しく、歌手たちにすごく好まれています。ここでぼくが愛されている間に上演され、成功するよう願っています」<sup>19</sup>と記した。

初演配役は次のとおり。

役名と声種	歌手
バルダッサーレ Baldassare (テノール)	エリオドーロ・ビアンキ (Eliodoro Bianchi, 1773-1848)
チーロ <i>Ciro</i> (コントラルト)	マリーア・マルコリーニ (Maria Marcolini, 1780 頃-?)
アミーラ <i>Amira</i> (ソプラノ)	エリザベッタ・マンフレディーニ (Elisabetta Manfredini, 1790-?)
アルジェーネ <i>Argene</i> (ソプラノ)	アンナ・サヴィネッリ (Anna Savinelli, ?-?)
ザンブリ <i>Zambri</i> (バス)	ジョヴァンニ・ライネル (Giovanni Layner, ?-?)
アルバーチェ <i>Arbace</i> (テノール)	フランチェスコ・サヴィネッリ (Francesco Savinelli, ?-?)
ダニエッロ <i>Daniello</i> (バス)	ジョヴァンニ・フラスキ (Giovanni Fraschi, ?-?)

楽曲は序曲 (シンフォニーア) と 14 のナンバーから成り<sup>20</sup>、序曲は前作《幸せな間違い》序曲の転用で、他にも旧作からの転用や素材の借用がある (後述)。題名役のチーロは男装を好んだマルコリーニのために書かれ、登場のシェーナとカヴァティーナ〈ああ！ 私の苦しみは、どうすれば (*Ahi! come il mio dolore*) (N.3) は合唱に続いて印象的な開始部を持ち、カバレッタに力強い用法が見られる。第 2 幕チーロのアリア〈お前を抱き、お前を抱き締めよう (*T'abbraccio, ti stringo*) (N.13-ii) は、定型的なアリア形式に第二のシェーナを挟んで新たな合唱付きカバレッタを設ける異例の拡大形式を採用している (図 37)。

カストラートを主演とする前世紀末のオペラ・セーリアの流れを汲む本作は、プリモ・ウオーモ (註：女性歌手でありながら 19 世紀初頭にはこう位置づけられた) とヒロインを歌う女性ソプラノのプリマ・ドンナが等しく主演とされる。それゆえアミーラもチーロと同等のアリアを持ち、第 1 幕の〈夫に会いたい (*Vorrei veder lo sposo*) (N.5 《幸せな間違い》イザベッラのアリアのカバレッタの転用改作を含む) は、後に《エジプトのモゼ》第 2 幕アマルテアのアリアに転用される名曲である。第 2 幕のアリア〈ああ！ わたしのために苦しまないで (*Deh! per me non v'affliggete*) (N.11) も技巧的な独奏ヴァイオリンの伴奏で異



図 37 第 2 幕チーロのアリアの総譜手写譜 (1820 年頃。筆者所蔵)

彩を放つ。初演歌手エリザベッタ・マンフレディーニはロッシーニが指揮した 1811 年のハイドン《四季》のソリストで、後に《シジスモンド》と《ブルグントのアデライデ》のヒロインを創唱する (図 38)。

テノールはバルダッサレ役とアルバーチェ役の 2 人で、第 2 幕バルダッサレのアリア〈なんと過酷で、なんと悲しい運命 (Qual crudel, qual trista sorte)〉(N.9-vii) は難技巧を駆使する規模の大きな楽曲となっている。饗宴の合唱に続く嵐の音楽 (N.9-v[Temporale]) は劇的展開と結びつき、葬送音楽を用いた合唱〈今日、怒れる神々が (Dunque in oggi i nume irati)〉(N.13-i) も効果的である (ロッシーニのオペラにおける嵐の音楽と葬送音楽はこれが最初)。ユニークな着想は旋律にたった一つの変口音だけを用いるアルジェーネのアリア〈不幸を軽蔑する人は (Chi disprezza gl'infelici)〉(N.12) で、後にロッシーニは作曲の経緯をヒラーに語っている——「《バビロニアのチーロ》には、ひどいセコンダ・ドンナがいたよ。彼女はものすごく不器量な上に声も最悪だった。それで慎重に試したら、たった一つまじな音を持っているのが判った。それが中音域の変口音。それでぼくは彼女のために、その音以外は歌う必要がないようアリアを書いたのだ。音楽的なことは全部管弦楽に委ねてね。そしたら曲が喜ばれて喝采されたから、ぼくの“モノトーン”歌手も大成功して最高に幸せだったよ」<sup>21</sup>。



図 38 エリザベッタ・マンフレディーニ

問題は、台本の劇的構成の弱さにあった。アリアの連続もその一つで、第 1 幕は N.3~5、第 2 幕は N.9-vii~13 がこれに当たり、各幕の中央にアンサンブルを欠く。1816 年にヴェネツィアのサン・ルーカ劇場で行われた再演の批評もその点を捉え、「この《チーロ》の台本は、素人の作品である」と批判している (『ヴェネツィア特権新聞 (Gazzetta Privilegiata di Venezia)』1816 年 3 月 1 日付)<sup>22</sup>。劇としての見せ場もドラマティックな展開を欠き、謎の手が壁に文字を記すシーンも後のロッシーニであれば異なるアプローチをいただろう。それでも最初のオペラ・セーリアとしては音楽面で満足すべき水準にあり、20 歳になるかならぬかの年齢を考慮すれば早熟な才能に驚くほかない。

3 月 14 日にコムナレ劇場で行われた初演は成功を収め、新聞批評にもこう報じられた——「(去る 14 日、土曜日の上演は) 劇の作家、音楽の作曲者、役者たちと主催者の努力により、とても幸せな結果に終わった。[中略] 音楽を書いたロッシーニ氏は、一曲ごとに繰り返す拍手喝采を送られる榮に浴した。[中略] この若きマエストロは、その音楽的才能において観客に素晴らしい希望を与えてくれる」(『レーノ県新聞 (Giornale del Dipartimento del Reno)』1812 年 3 月 17 日付)<sup>23</sup>。ロッシーニ自身も母に宛てた手紙の中で、「ぼくのおラトリオの結果がすごく良かったのを知りましょう」と書き、15 スクード送金する旨を記している (1812 年 3 月 24 日付)<sup>24</sup>。

最初の再演は翌 1813 年 3 月にマントヴァとフィレンツェで行われ、その後イタリア各地で上演をみたが、その数は少なく、1832 年 9 月のペルージャを最後に忘れられた。国外での上演は 1816 年のミュンヘン宮廷劇場を皮切りに、1819 年ヴァイマル、1822 年ドレスデン、1823 年にロンドンと続いた。20 世紀の復活上演は 1988 年 10 月 30 日、サヴォーナのキアブレラ劇場で行われた<sup>25</sup>。

<sup>1</sup> Giovanni Carli Ballola, *Sul filo della memoria*. in programma del ROF "L'inganno felice", 1994., p.13. 参照。

<sup>2</sup> この題材の文学的モデルに関する最新の論考は、Marco Beghelli, *Un intreccio di trame: i modelli letterari dell'Inganno felice*. in programma del ROF "L'inganno felice", 2015., pp.29-35. 参照。《シジスモンド》の成立とその台本については全集版《シジスモンド》序文を参照されたい。

<sup>3</sup> その間アンジェロ・ベッコクと結婚し、芸名に「Teresa Giorgi」「Teresa Belloc」「Teresa Bellocchi」「Teresa Giorgi [-] Belloc」「Teresa Belloc [-] Giorgi」を用い、現在の文献では「テレーザ・ベッコク Teresa Belloc」または「マリーア・テレーザ・ベッコク Maria Teresa Belloc」が使われる

<sup>4</sup> Vittorio Della Croce, *Una giacobina piemontese alla Scala, La primadonna Teresa Belloc*, Torino, Eda, 1978., p.93.

<sup>5</sup> ロッシーニ作品は《幸せな間違い》バトーネ以外に、《試金石》アズドゥルーバレ伯爵、《アルジェのイタリア女》ムスタファ、《イタリアのトルコ人》セリム、《トルヴァルドとドルリスカ》オールドウ公爵、《泥棒かささぎ》フェルナンド、《マオメット 2 世》タイトルロール、《セミラーミデ》アッスールを創唱。

<sup>6</sup> 自筆楽譜は消失。以下、楽曲ナンバーは 1994 年 ROF 上演プログラムに準拠。

<sup>7</sup> サン・モイゼ劇場の史料や新聞批評に併演作品の記録がなく、2 日目と 3 日目 (1 月 9 日と 10 日) はジュゼッペ・ファリネッリ作曲《口に出さぬ愛 (Amor muto)》との二本立てで上演。パレエはケルビーニ作曲《サン・ベルナルド山、またはエリーザ (Il monte San Bernardo, ossia Elisa)》が上演されたものと思われる (筆者による推測)。

<sup>8</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti*, vol.I., 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822., a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni. Pesaro, Fondazione Rossini, 1992., pp.31-33.

<sup>9</sup> Eduardo Rescigno., *Dizionario rossiniano*, Milano, Biblioteca universale Rizzoli, 2002., p.530.

<sup>10</sup> Della Croce, op.cit., p.96 と p.175. は「34 回」とし、拙著『プリマ・ドンナの歴史 II』でもこれを踏襲したが、Miggiani, op.cit. では 14 回しか確認できず、ここに訂正する。

<sup>11</sup> Della Croce, p.96.

<sup>12</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, Fondazione Rossini, 2004., pp.6-9. [書簡 IIIa.2]

<sup>13</sup> Bruno Cagli, *La donna salvata dal mare*. in programma del ROF "L'inganno felice", 1994., p.34. ではチェーラの娘と推測され

---

たが、Andrea Malnati, *Da Venezia al Nuovo Mondo: fortuna e tradizione dell' Inganno felice*. in programma del ROF ” *L'inganno felice*”, 2015., p.16.において妹と修正されている。なお、サン・モイゼ劇場の春季プリマ・ドンナは他の歌手が務め、マッダレーナ・チェーラは《幸せな間違い》のみ出演。

- <sup>14</sup> 以上 1813～15 年の上演記録は、A cura di Marcello Conati, *Contributo per una cronologia delle rappresentazioni di opera di Gioachino Rossini avvenute in teatri italiani dal 1810 all'anno teatrale 1823*. (in *Atti dei convegni lincei 110, La recezione di Rossini ieri e oggi. Roma 18-20 febbraio 1993*, Roma, Accademia nazionale dei lincei, 1994., pp.231-250) ] 及び Malnati, op.cit.に基づくが、独自に追加した劇場名もある。但し、コナーティの挙げる 1813 年 1 月以降トリエステと 1815 年 8 月フェルモの上演は誤謬と判断して削除した（トリエステの上演記録は最初のロッシーニ上演を 1814 年とし、フェルモは後にコナーティが作成したマルケ州の上演記録で除外されている [1816 年の可能性あり]。）。
- <sup>15</sup> Alfred Loewenberg., *Annals of Opera 1597-1940.*, Genève, Societas Bibliographica, 1955., p.624. (1872 年ナポリでのリヴァイヴァルを除く)
- <sup>16</sup> 詳細解説と上演歴は日本ロッシーニ協会ホームページ掲載の拙稿「《幸せな間違い》作品解説」を参照されたい。  
<http://societarossiniana.jp/inganno.pdf>
- <sup>17</sup> アヴェンティについては、Paolo Fabbri, *Il conte Aventi, Rossini e Ferrara*. (in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, Anno XXXIV., Pesaro, Fondazione G. Rossini, 1994., pp.91-157.) 参照。
- <sup>18</sup> ロッシーニとマルコリーニが恋愛関係にあったとする伝記作家もいるが確証はない。だが、《バビロニアのチーロ》に続いて《試金石》《アルジェのイタリア女》《シジスモンド》の初演歌手となるなど、ロッシーニと特別な関係だったのは疑いえない。
- <sup>19</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., p.4. (書簡 IIIa.1)
- <sup>20</sup> 自筆楽譜は消失。以下、楽曲ナンバーは 2012 年 ROF 上演プログラムに準拠。
- <sup>21</sup> Hiller, p.101.
- <sup>22</sup> Rescigno, p.535.
- <sup>23</sup> *Lettere e documenti IIIa.*, p.7., n.11.
- <sup>24</sup> *ibid.*, pp.6-9. [書簡 IIIa.2] 後年ロッシーニは「自分の失敗作の一つ」と述べ、その初演の失敗にちなんだエピソードを語っている (Hiller, p.101.)
- <sup>25</sup> Loewenberg, op.cit., p.625. は 1817 年 6 月 18 日ヴィーンのアン・デア・ヴィーン劇場を挙げるが、同劇場上演記録に無く除外した。なお、ミュンヘンでの上演を 1816 年 11 月 6 日とする文献もある。詳細解説と上演歴は日本ロッシーニ協会ホームページ掲載の拙稿「《バビロニアのチーロ、またはバルダッサレの没落》作品解説」を参照されたい。